

米喜の  
眩  
き

名

部

茂

米寿の眩き 目次

まえがき

第一章 故郷

ふるさとの一日 ..... 2

母のうた ..... 6

般若湯 ..... 9

小豆飯(赤飯) ..... 12

まんじゅう ..... 14

筍 ..... 16

汽笛 ..... 18

第二章 敗戦忌

敗戦忌 ..... 22

座右の銘 自作篆刻「人間萬事塞翁馬」



ドラ息子	79
猫の寿命、人間の寿命	81

#### 第四章 嘆息

愚痴	86
挨拶は子供から？	90
尻を閉めよ	93
英語教育論へ一言	96
明治生まれの教育勅語	98
「庶民よ、怒れ。」	101
メダルの嘆き	105

#### 第五章 即興走り書き

自分史発刊の余韻(一)	108
-------------	-----

十二月八日という日 ..... 25

花の歴史 ..... 27

世界遺産ナスカの地上絵 ..... 29

慰霊(真実と報道のギャップ) ..... 31

疑問 ..... 35

楽老と嫌老 ..... 38

粹なおまわりさん ..... 42

闇み市 ..... 45

### 第三章 もらってくれませんか(捨猫)

もらってくれませんか ..... 50

続・もらってくれませんか ..... 55

続・もらってくれませんか(第三弾) ..... 59

捨て猫の後日談 ..... 63

福猫 ..... 73

カミキリ虫	166
傘寿から米寿まで八年間の短歌、俳句、川柳、漢詩	169

## 第六章 筆墨雑考

書について思うこと(一)	182
書について思うこと(二)	185
愚人は八十路にしてなお迷う	187
國字川柳	190
無門関雑考	194
雅号の由来	203

## 第七章 米寿の眩き

後期高齢者の覚悟	206
絆(きずな)	210

自分史発刊の余韻(二)	111
迷走	113
隠岐の島	116
ピストルが恐かった	119
牛はいなかった	123
幸福の条件	127
バッテリー	130
火曜日は特(得)買日	133
お使い坊やスーバー・マン	138
婦人服売場見聞録	141
雀の戸籍簿	147
続・雀の戸籍簿	150
二億円の宝クジ	152
小学生の方丈記	155
馬鹿馬鹿しいバナナの話	159
「お父さん、あほやね」	162

年譜	291
あとがき	289
旅立ち	286
七・七 八・八	283
鏡	279
老化への抵抗	272
春近し	267
入院八日間の見聞	261
老いの寝言	258



日記	214
行きあたりばったり(第三の人生)	216
鶯	219
ラジオ深夜便	221
お雑煮談義	225
知らぬは自分だけ	227
五彩会今昔	230
自分史に対する迷い	233
文久生まれの祖父	236
パジャマ	241
古い扇風機	243
目からうるこ	244
老人は老人らしく	247
「ここはどこですか」	249
涅槃	252
シュレツダー	255

---

第一章

---

故  
鄉

---

## まえがき

私は平成十八年五月十六日、『撓を越えて』と題して自分史を発行した。数え歳八十歳の時である。八十歳を意識すると、はたして自分の命がどこまで保てるのか疑問を持った。そこで、あわてて自分の生きてきた道筋を、子供や孫に書き残しておかねばと原稿作りに取り組んだ。それは自分自身の出生から八十歳までの経過をたどった自分史となった。

自分史を綴る会のメンバーの一人から、

「八十歳は傘寿だから良い記念になりますよ」

との発言もあり、なるほどと私も納得してまとめることができた。

それから八年間、このたびの『米寿の呟き』は、一カ月に一度の自分史を綴る会で発表した、自作を中心に集めたものである。

その時、その時の思いつくまま、自分の感情を文字として表現したつもりであるが、はたして意をつくせたかどうかは甚だ疑問である。

米寿を迎える老人に免じてご笑覧ください。

なるほど、そういえば私は三年間帰省していない。甥の、「六人揃って会うのも、もう最後じゃで」と言うのも納得できる。

一番上の姉が九十六歳で、その夫（義兄）は九十九歳である。次の実家の兄は九十六歳、その次の姉は九十一歳、その下が八十六歳、次が八十四歳、最年少の妹が七十八歳である。甥の心配ももつともなことである。

こうして故郷に集まったのは私たち兄妹六人と、まだ生きている連れ合い三人と、さらに兄の子供四人とその連れ合いや孫たちもいれて総勢二十名。にぎやかなひとときであった。

お互い気を遣わなくてスッキリした気分の盛会であった。論ろん談風発だんふうはつ、昔話の花が咲いた。

義姉の墓や父母の墓参りには、達者な若者たちに混じって私たち夫婦も参加した。何しろ昔は土葬であるから、墓の面積も広いし、石碑も代々のものが立ち並ぶので管理も大変である。そのうえ墓地は二カ所にわかれて一キロばかり離れている。昔



故郷の眺め

## ふるまつの一日

平成二十三年四月三日、日曜日、私たち夫婦は故郷岡山県の美作市に帰省した。市といっても、実家のある場所はかつては英田郡粟井村大字粟井といって、中国山脈の南面の山麓やまひたの閑村である。平成の大合併とかで、何カ町村が集められて市ということになっただけで、山の姿も川の流れもさして変わったところはない。ただ道路は広く舗装され、かつては藁屋根わらが大半だった民家が立派な瓦屋根になっているのがまぶしく目に入って来た。

九十四歳の兄が一人実家を守っていたが、一昨年、都会の会社勤めの息子（私の甥）夫婦が定年退職で帰郷した。九十二歳まで車も耕運機も運転していた兄は、安堵したせいか急転直下、車椅子の生活になっていた。

甥から電話があったのは一カ月あまり前のことである。

「叔父さんよ。親爺も歳じゃし、ほかのおばさんたちも弱ってきとるで、お袋の十七回忌と、お婆ちゃんの三十三回忌を兼ねて兄姉妹きょうだい、皆んな集まったらどうじゃろう。親爺の兄姉妹六人全員が集まるのも最後じゃと思うで！ 中屋のおばさんも少しぼけてきたみたいやし、亀の甲のおばさんもほとんど寝てるみたいじゃけん」と言う。

と言う。

「大黒柱もジャッキで五六センチ上げて、ひずみを直した」と言う。襖など建具も、もちろんである。

「よくこれだけのことをやったなあ！」

と私が感心していると甥は、

「そのかわり、退職金を全部つき込んだわ、あとから考えたら建て替えたほうが良かったと思うぐらいや」と言う。

世代の交代がひしひしと感じられた。

それにひきかえ、六人の兄妹やその連れ合いの老いは思いのほか進んでいた。一人の姉などは、

「あれは誰じゃいな」

と尋ねられたほどだ。老人の三年間は日々老いの進む、やるせない時間だったのだ。盛会だった甥夫婦の計らいの中にも、ひそかに味わう無常のひとこまであった。

(二〇一一年四月十一日 記)



生家付近 (中央が生家)

からの三軒の分家の墓も一緒に立っている。四代以前の石碑の字はすでに苔むして読むのも困難である。火葬になって初めて義姉の遺骨は、新しく建てた「先祖代々の墓」に納められている。故郷の先祖の祀りかたも時代とともに変わるのだ。しかし私はこの墓に入ることはないのだと思うと、一種の孤独を味わった。

甥はあらかじめ、

「お供えやお心遣いは一切ないことにしてくれ」

と言っていたが、私はお供えのかわりに「妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五」を謹写した掛軸一本を桐箱におさめて本家に奉納した。ほかに水墨画「花意竹情」の軸一幅は、今回の甥夫婦の配慮に感謝の心をこめて贈った。これは甥に対するお礼というよりも、甥の嫁が今回の企画を甥にすすめて実行したと聞いたからである。この嫁がいる限り、本家は安泰であるとさえ思ったからである。

それは家のたたずまいにも感じられた。私の覚えている故郷の家は内部が見事に変化していたのだ。台所も、トイレも、風呂も、母屋の天井までも真っ新である。甥に尋ねると、「鴨居と柱、それに床の間の天井以外はすべて新しくした」



生家から見る双子山（能登香山）

私は三冊を捨てるのをやめた。私のつたない毛筆や俳句でも、この母の一首で捨てられなくなったのだ。

そういえば確か古い封筒に母の手紙が入っていたのを思い出して方々を探して、やっと見つけた。赤茶けた封筒に便箋二枚があった。

内容は、

「御無沙汰して居ります。皆んな元気ですか。母もこの夏は大変体に障りましたが、まだ死ぬ所へは行かれないので困ります。まあまあ——、自分の事だけして居ります。同封の短歌を訂正して下さい。母は只これだけで頭を養って居ります。どうもぼけそうでなりません、又帰って下さい。」

茂様方、御一同へ 老母より」

そして二枚目の便箋に次のような俳句二句と短歌一首が書いてあった。

九月号俳句・兼題・月

虫の音に忍び歩めよ月あかり



## 母のうた

傘寿、すなわち数え年八十歳で私は自分史『撓を越えて』を発刊した。その中で父のことは色々書いたが、母について書くことは少なかつたようである。母の愛情が少なかつたわけではない。筆の向くままに書き続けていたら、父から受けた躰や教訓が多かつたので母のスペースがせまくなつてしまつたに過ぎない。

今日書棚を整理していたら、和綴じの画仙帳三冊が出てきた。つたない字で自作の短歌や、俳句を毛筆でしるしたものだ。題して『みちの里 一』から『三』までの三冊をペラペラめぐりながら、「これは捨ててもいいな」

とつぶやいた時、はたと目がとまった。

母が私に送つて来た短歌一首が、手荒い私の毛筆で記録してあるではないか。昭和三十七年の記録だから、母七十歳の時である。

その一首

年に一度帰郷する子を待つのに生きおる如きわれとはなりぬ

あらためてよくみると、字はたどたどしくても楷・行・草に変態仮名が多い。昔から俳句や短歌に興味があることは知っていたが、漢字三態と変態仮名には驚いた。明治二十六年生まれの母には、あれだけの潜在的素養そようがあったのかと改めて懐かしく思う。

(二〇〇七年七月二十九日 記)

### 般若湯はんじゃとう

昭和五十六年ごろのことである。父の十三回忌と母の三回忌と先祖代々の供養の法事が故郷の粟井（現在の岡山県美作市粟井中六二八）でいとなまれた。長男である兄・文夫は大変気を遣ったことと思う。父の兄弟姉妹は五人いて、その子供たち（すなわち我々のいとこ）は私が覚えているだけで十七人いた。母方のいとこもまた、私の知る限り八人はいた。昔からの近所の分家も四軒あって、すでに百年以上も前からの親戚ではあるが一族としてのつきあいがある。そのうえ私たち、父母の子が六人いる。それにはおのおの連れ合いがいて、その子供すなわち孫も十七人もいる。皆んなが集まると軽く六十人を超す。

こんな家系だから、法事の当日は、生家のただっ広い障子や襖を取りはずして大広間にしても、

十月号短歌・題・秋たけなわ

老いたれば臥して農機の音遠く秋たけなわを知る我が身かな

十一月号俳句・兼題・小春日和

柿むくや小春日和を背に受けて

この便箋の裏に次のようなことが追記してある。

「十五年ほど前、爺ちゃんと二人で柿の皮をむいた時を思い出しました」

と。たぶん郷土誌に投句したものだろう。

昔、歳をとると、涙もろくなると誰かから聞いた。不覚にも私はつい涙ぐみ鼻水がこぼれた。

「母のことを何と粗末にしてきたことだろう」

そう思って何回も読み返してみた。



母 よしの

かった。まさに宴会となった。その時、ある従兄が言った。

「さあ、坊主も去んだし、落ちついてゆつくり飲もうや。仏もそのほうがよろこぶで」  
大きな声だった。ところがである。

「坊主はまだここにおるで」

即座に返ってきた坊んさんのすみきった声に一同びっくりした。

坊んさんは表の縁側の隅で、僧衣から平服に着替え中だったのだ。

一座の者は「どどーっ」と笑った。

「おじゅっさん、まだここにおんさったんかな」

「ハハッハッハ。気にせんと飲めや。仏の供養じゃ。般若湯はんやとう言うじゃでな」

こう言つて坊んさんは自転車で帰つて行つた。

守安老僧は津山中学校で、私の二十年も先輩である。しかも私の恩師、衣笠巖先生と同級生で、いつも衣笠先生のことを、

「巖がさん」

と言つていた。

敗戦直後は、

所せましと人・人・人の集まりである。親族全員が集まったわけではないが三、四十人はいたと思う。

法事の主役は檀家寺の圓福寺の住職、守安さんであった。博学多才でユーモアのあるお坊さんだ。読経の声は清澄せいじようにして朗々ろうろう、

「あの坊ぼんさんほどお経の上手な坊ぼんさんは、ちょっとどこにもおらんで」

と村人の評判だった。事実、高野山で何かの行事があると守安僧正はかなりの重役担当で音吐朗おんとろう朗ろうの勤行を務めたと、参加した檀家衆の話だった。

法事が終り、上座に僧正が座り、親戚の面々が座につき、家長である兄の挨拶が終る。そして会食が始まる。村の役場の話や、米の出来不出来の話、父や母や昔の人々の話題が次々と出てくるのは、田舎のこうした行事の常である。杯も人から人へと回ってくる。

やがて坊ぼんさん（あえてそう呼ばせてもらう）は、一座にひとこと残して席を立った。兄嫁は別に包んだ、お持ち帰りの包みを渡して勤行のお礼をのべ、法事は無事終った。約二時間ほどの、田舎の本家にとっては重大な行事だったのだ。

それから五分もたったろうか。親族どうしの気兼ねのない会話が盛り上って、笑い声が絶えな

ような差ができたかという、次のような父の昔語りがあったからだ。

近隣に腕のよい大工さんがいて、四里あまりの遠い農家から家の建て替えを頼まれた。自転車さえも容易に買うことのできない明治末期のことだから、大工さんはその家に泊り込みで仕事をすることになった。

ある晩、夕食に小豆飯が出された。大工さんは、

「わしは小豆飯が好きじゃけん、これはうまいわ。もう一杯もろうてもええかな」

「そがいに小豆飯がうまいかな。そんならなんぼでも食べてつかあさい。よけい炊いとるけん」

大工さんと農家のおかみさんとの会話が楽しそうに夕食をにぎわしたとのことだ。

大工さんが好きだと言うので、その次の日から毎晩毎晩、小豆飯の夕食が出るようになったという。十日間も毎晩小豆飯が出ると、さすがの大工さんもうんざりしてきたが、自分から好きだと言った手前、もういやだとも言えない。悩んだ末に彼は寝言でこう言ったそうだ。

「もう小豆飯はいらんけん、普通の飯にしてつかあさい。麦飯の茶漬けが欲しい」

明るる日からピタリと小豆飯は止まったという。これに似たような落語のネタがあったような気もするが定かでない。

「これからは村人も英語を話せるようにならんといけん」

と、村の若い人たちを集めて英会話の教室も作ったと、ある先輩から聞いた。

また、『作東町史』という郷土史の研究や編集にも活躍されて、その記録もたくさん残っている。猪や猿や熊の出て来る田舎に、悠然とくらす老僧の姿は、兼好法師けんこうぼうしや鴨長明かもろちようめい、さらには芭蕉などを連想させるのである。

いまだに、

「坊主はまだここにおるで」

の清々すがすがしい声を思い出してなつかしい。今生きておられたら、ちょうど百歳だと想像する。合掌

(二〇〇七年八月三日 記)

## 小豆飯(赤飯)

私が生まれた田舎(岡山県美作市粟井中)では赤飯のことを小豆飯あずきめしといった。私の意識の中では、赤飯といえは高級品で、小豆飯と聞けば田舎の、なかば代用食という認識が頭をよぎる。

それぞれの作りかた、炊きかた(または蒸しかた)に大した違いはないと思うのだが、なぜこの